

## P-030

## 医療的ケア児に関わる保育士が抱く困難感と支援の方策に関する文献レビュー

船岡 未恵、永谷 智恵

長岡崇徳大学 看護学部 看護学科

**【目的】**本研究は、医療的ケア児（以下、医ケア児）の保育に関わっている保育士が抱いている困難感に焦点を当て文献検討を行い、保育士の困難感への支援方策を明らかにすることである。**【方法】**医学中央雑誌Web版より、会議録を除き「医療的ケア児」and「保育士」のキーワードで文献検索し32件を抽出した。そのうち研究目的と照合して8件を分析対象とした。文献を精読し、本研究の目的である医ケア児に関わる保育士が保育活動における困難感に関する内容をコード化し、類似性ごとに整理しカテゴリ化した。**【結果】**医ケア児に関わる保育士が保育活動で抱いている困難感として、4のカテゴリ、10のサブカテゴリに分類された。以下、文章中のカテゴリは『』、サブカテゴリは『』で示す。保育士は医ケア児との『関わり方がわからない』戸惑いと、医ケア児の『命への心配』による【医ケア児に関わる戸惑い】を感じていた。保育活動を行っていくことで『保育活動と医療処置のどちらを優先するか悩み』、医療処置の必要性を感じながらも『看護師の医療処置により保育活動の中止』による【達成できない保育活動のはがゆさ】を感じていた。また看護師と行う保育活動では、『保育士と看護師の目線（捉え方）の違い』や『看護師との役割調整の迷い』ながら、【看護師との連携の戸惑い】を感じていた。その一方で『保育活動に協力的』な看護師の存在により『看護師がいる安心感』を持っていた。支援の方策として、医療的ケア児の保育活動を遂行していくために『多職種の意見を参考に情報共有』すること、『相談しやすい関係性』があることで医ケア児を【受け入れるための環境が作られる】と認識していた。**【考察】**本研究では、保育士は医ケア児と初めて関わる戸惑いとして、命への心配や関わりに戸惑っていること、多職種との意見交換や情報共有の必要性が明らかになった。医ケア児の保育活動を行うためには、看護師以外にも行政やリハビリ等の多職種と意見や情報を交換できる場を作ることや、医ケアの理解につながる研修等が保育活動の戸惑いの軽減につながることが示唆された。

## P-031

## 医療的ケア児の保護者は訪れる障壁をどのように乗り越えるのか

仲本 美央<sup>1)</sup>、田中 真衣<sup>2)</sup>、市川奈緒子<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>白梅学園大学 子ども学部 子ども学科、

<sup>2)</sup>白梅学園大学 子ども学部 家族・地域支援学科、

<sup>3)</sup>渋谷区子ども発達相談センター

2021年9月に医療的ケア児支援法が施行後、各自治体をはじめ、医療機関、保育機関、教育機関等は医療的ケア児とその家族の支援に向けてさまざまな体制整備をし、徐々に社会変化が現れている状況にある。しかしながら、その一方、筆者らによる医療的ケア児の保育に関わる人々への調査（2024）では、各地域における支援体制の整備の有無だけでなく、支援を必要とする当事者のニーズや意識、行動の状況によって現状における困難解消へ向かうことができず、未だ孤立した状態で苦慮し、さまざまな支援に取り組むことができない保護者の存在があることが明らかになった。そこで、本研究では、特に保育を中心として社会資源を自らの生活に取り込み、我が子と共に生きる環境を形成しながら歩む医療的ケア児の保護者の姿に着目し、その生活において待ち構える障壁をどのように乗り越えているのかについて捉えることを目的としている。保育施設に通い、医療的ケア児を育てる保護者3名に研究協力に対する同意を得た上で、インタビュー調査を実施した（白梅学園大学・白梅学園短期大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会にて承認済）。ICレコーダーにて録音した後、逐語記録データを作成した。データ解析については、ナラティヴ分析の一手法であるテーマ的ナラティヴ分析（リースマン、2014）のアプローチを用いた。その結果、医療的ケア児の保護者は、子どもが生まれた直後から就学前までの期間において、「出産直後から現在に至るまでの障害受容」「病院の通院」「移動手段」「社会からの偏見」「経済的不安」「仕事の復帰」「仕事の選択」「自治体との交渉」「保育施設の受け入れ」「就学時の選択」など生活におけるさまざまな障壁と向き合っていた。しかし、その障壁を乗り越えるために、「障害理解に向けての知識の習得」「医療機関の把握と利用」「療育機関の把握と利用」「自治体への相談とさまざまな働きかけ」「各種専門職への相談」「当事者同士のつながりの構築（地域の医療的ケア児の子育て広場やその他のネットワーク）」「SNSの活用（遠方地域の当事者同士の情報交換）」「保育現場への信頼」「保育園の保護者との交流」「インクルーシブな保育環境」「新たな仕事のための資格取得」「就学相談」などを自らの意識や行動として取り込みながら、そのことを生き抜く力にしてわが子と共に生きる環境を形成していた。